

LEONTODO

N - ro 62

ENHAVO

		Pago
第4/回北海道大会印象記 佐藤忠利 I
北見合宿の体験記 向井原 宏 5
 齊藤和子	
 坂下正幸	
 A. Hošida	
Kun Joy MARKARIAN Sin. Fukuda11
La memoroj por la germana verda paro..	H. Kodama14
S-ron Schleicher ni bonvenigis varme..	T. Saitoo17
あの人.このひと19
「カムチャツカ縦断記」 JAMA 北見支部21
北見エスペラント協会移転のお知らせ23
JAMA, 78年夏山行計画24
Monto Hajaĉine	T. Iĉikaŭa25
Ni interŝangu sonbendon kun eksterlandaj Esperantistoj Sin. Fukuda28
低くひくく近い所で (3) A. H30
LEONTODO N-ro 61を読んで 栗田公明31
北海道大会ごあんない32

第41回北海道大会印象記

佐 藤 忠 利 (札幌)

7月23、24日の両日、イギリスから来道中の f—ino Joy Markarian をまじえ、酷暑の中、旭川市に27名が集まった。出席者は例年より少なめだったが、久々に外国からのお客を迎えての大会で活気ある生のエスペラントを楽しむことができた。

1日目の宿舎は市内のサンケイ会館である。昨年の札幌の都市会館と同じイメージを持って参加された人も多かつたようで、同会館を発見できずにとまどつたそうだ。各地の委員がぼつぼつ集まりだしたところにHEL委員会を開く。6時からのパンケードは例年の調子で始まる。Joyがみごとなハンスバキをみせるのを僕は隣でただアングリと口を開けながら見ていた。日本食はあまり彼女には合わなかつたろうに(それも決して上等のものではなかつたので)きちんと片付けたのには感心してしまつた。皆がいかげんおしやべりにあきてきたころ、Joyにスライドをお願いする。最初スライドをまきちらかすアクシデントがあつたが、Joy續ちつともあわてず慣れた調子で解説し始めた。(もつとも左手でバイオリンを弾く奏者があらわれたりで、左右がひっくり返つたようだつた)。スライドは英国の学校を写したものだ。この時の映写機は椿さんの学校から借りた物だつた。ありがとうございました。スライドの後は椿さんのギターに合わせて歌を歌う。Marimoをもつてくるべきだつたのに忘れてしまつた。一応の行事はこれで終つたが、数人かたまつて夜の散歩を楽しもうという組もあり、もつともおとなしく旭川名物「夜の三・六街」ならぬ小さな喫茶店で終了した様子である。

2日目は大会協議会で場所を旭川労働会館に移す。この移動が案外なもので、旭川奇ちの僕には距離など有つて無きがものだつたのだが、平均年令が毎年上昇しつつある大会参加者にはいささか過度な散歩のようであつた。

議長は星田氏にお願いする。HEL委員長挨拶の後、各地方会、HEL、エスペラントセンターの活動報告が続く。委員は札幌の奈良、黒川、柴田の各氏が抜けて新たに椿、留目、福田の各氏が入つたほかは変らず。事務局長の決定は今年もできず、従来通り札幌の委員が執行委員を兼任し、連帯して責任を負いつつ活動することが確認された。また、相沢氏から「HEL後援会」の設立が提案されたが、現在のHEL会計が非常の混乱している状態で

は実施が困難なので、具体的な実現の可能性と必要性が見られた時に委員会からまたあらためて提案し直して実行することになった。次期大会の開催地であるが、今年はめでたくすんなりと苫小牧と決定し、その次は小樽でとの希望も出された。その後 Joy に北海道に来た感想を語ってもら。札幌、小樽、苫小牧そして旭川と目まぐるしい旅行を続けた彼女には見るものすべて目新しいものばかりだったようで、やたら *sensaĉoj* を連発する。

"Mi vidas literojn, sed kiujn mi ne povas kompreni.
Kelkfoje mi vidas anglajn vortojn. Sed nur Vortojn!
Ĉirkau mi nur troviĝas Sensaĉoj!" といつた調子。しかし立て板に水で本当に良くしゃべる。あんなに続けざまに出てくる Esp. を聞くのは東京の Krizantemo が酔つた時の Malseriozulo 以来だ。例年の寸劇は札幌提供のもの 2 点。2 つとも日頃の学習の成果を見せた好演だった。最初は福田君と、これは特別にお願いした稚内の Kunjo で「針の "目" それよも "耳" ?」というもの。おつきは留目さんと柴田さんの "La Naciisma Viruso"。これは本格的演劇に近づくものだった。もつとも御西人のイキの良さはおして知るべしで、今さらながら思うが我々はアテられたと言ふところか。2 つとも F. Faulhaber の "Esperanta Mozaiko" におさめられているので興味を持たれた方はどうぞ Libroaervo の方へ。

記念さつ影で予定が終了し、駅の近く「かめや」という食堂で昼食をとる。これも来た時と同じくらい時間がかかったのでいささか申し訳けないと思う。ここでは Joy を纏り困って質問攻めにあわす。もつとも / 6 才の彼女にはどうかと思われる質問もつあたりで、例えば

"Kiu koloro estas erotika en via lando ?"

とかで、もつともこの質問、即座には理解してもらえず、少しの説明後、こんどはきつぱりと

"Nigra !"

と答えたのは見事なものだった。

3 時頃にポツポツ散会になる。この時 北見の大島先生に 30 分の違いで余計な駐車料と手間をおかけしてしまう。これでやつとすべての失敗の打ちどめ。Joy は氏の車に乗つて北見へ向つた。もつとも Kitami がどこにあるのか知らなかつたことだろう。Asahikawa も覚えてくれなかつたようだから。

札幌行きの汽車の時間まで間があつたので旭川市内のさる unika な喫茶店で

若手数人で感想を語り合う。

A氏曰く、

「毎日話してんだも、うまいの当然だわ」

B君 それでも

「でもあんまり難しい単語は使いませんでしたね」

Cさん語つて

「でも／＼才ぐらいで良かったよ。へたにあんまり出来るのくると、女性問題とかイデオロギーでもうとつてもついていけないもね。それであちらさん欲求不満になつて「日本で本当に Esp. できるのは教えるほどだ!」なんて言つてくんだから。あのぐらいで練習相手には本当にちよとどいいよ。」

今年の大会は地方会のない所で行なわれ、札幌から宿泊の場所にしろ手さぐりの状態だつたので、本当に未熟な内容になつてしまつた。旭川大会が決つたのは今年の委員会だが、その時この決定を支持した若手のうち今年まで残つたのはなんと僕一人になつてしまつていた。おまけに試験週間と大会とが重なり、準備どころではなかつた。活動のけん引力が特定の個人に集中するのは決して良いことではない。僕にしろそんな気持ちはなかつたのだが、まわりの動ける人間の層が薄くなるにつれ、必然的に浮び上らざるを得なくなつてきた。これはある程度しかたのない事だ。しかしそういった運動のありかたは、とかく消極的になりがちだ。

大会協議会終了後、速来の *malnova Esperantisto* に握手を求められた。

「これからもよろしく。ありがとうございました。」

これはどうしたことだろう！ 僕はその人に初めて会つたのだ。第一僕はその人に感謝されるだけのことをやつてきただろうか？

道内に多くの *Esperantistoj* がいる。そして僕らは Esp. をかじり始めたその時から必然的にその中心に置かされてしまう。これはまあ仕方のないことだ。しかし思うに、僕（個人で考えよう）は対外的な（道外という意で）事務や自分達の活動にきゆうきゆうとしているだけで、本当に北海道に住む *Esperantistoj* のことを考えてみたことがあつただろうか。こうして大会に出て来てくれる人がいる。祝電を打つてくれる仲間がいる。彼らは皆自分達が Esp. にかかわり合つているのだということを大会という場で確かめていく。 *Esperantujo* に大会を否定する人は沢山いる。彼らの主張にももつ

ともな所が多い。現場の者にしか分らない悩みも僕には分ると確言できる。しかし大会は本当に必要なのだろうか。お祭りであつてもいい。協議会なんかは本当はどうでも良いのだ。大会は出会いの場、そして新しい Esp. の魅力を見出す発見の場で良いのではないか。

Esperantismo は Humanismo である。そして Esperanto が単にそこにとどまっている限り、決してこれ以上の進展はあり得ないだろう。今(この原稿は / / 月 / 4 日に書いている)札幌に一つの運動が芽生えつつある。それは労働者連が作り発展させていく Esperanto—Movado である。その将来は今の所全く分らないが、これだけは指摘しておこう。彼らが真に Esp. を武器にした時、Esp—ujo はどう変わるだろう？



La 20-an de julio '77. M. Saito. J. Markarian.

北見合宿の体験記

向井原 宏（佐呂間）

去る10月8日～10日に、北見で行なわれた合宿に参加した。ぼくに
つては、はじめての合宿だった。このことを話す前に、ぼくがエスペラント
を知つたきつかけから話すことにしよう。

まずぼくが最初にエスペラントを知つたのは、まだ小学生の頃だったと思
う。母がぼくにエスペラントという人工語があるということ話をしてくれた
のだが、その時はまだ気にもとめなかつた、そしてしばらくは、そのことを
忘れていたが、中学校の国語の教科書に「エスペラントの父ザメンホフ」と
いうのがのつていたのを見てから、エスペラントを学んでみたいと思うよ
うになつてきた。ぼくはこの頃、いろいろ全国の人と話せをらいいと思つて
ドイツ語を学びはじめた。たしか中3の時である。次の年には、フランス語
も手をつけた。そうしているうちに、ある日テレビで、北見でエスペラント
の講習会があることを聞いた。北見へは通うことなどできなかつたが、自分
一人で学ぼうと思つて、テキスト、辞書などを送つてもらつた。そこまでは
よかつたのだが、学校の勉強も忙しく、ドイツ語、フランス語そして英語で
は、リングフォンで発音を身につけようと思ひ、それで勉強をはじめたのも
手伝つて、なかなか思うようにエスペラントの学習が進まなかつた。ところ
がある日北見で3日間合宿があるという案内状が送られて来たので、いいチ
ャンスだと思つて申し込んだ。合宿のすぐあとで、中間テストがあつたので
少しためらつたが、エスペラントの魅力には勝てなかつた。

いよいよ合宿という日に、少し不安になつてきた。ぼくみたいな、全然エ
スペラントを知らない人間が、ついて行けるかなと思つたからである。その
上、合宿に行つてみると、高校生は1人もいないのである。ぼくは非常に心
細くなつた。そして自己紹介の時、みんな、エスペラントで話していたり
で、もつと勉強しておけばよかつたと思つた。

いよいよ *kurso* が始まつた。日常会話をするというので、わからないだろ
うと思つていたが、思つたより簡単だつたので、一安心した。その上、エス
ペラントは、単語をみると、だいたいの意味がわかつた。例えば *Bonan
tagon* などは、フランス語のボンジュールとドイツ語のグーテンタークを合
わせたような感じだつた。そんなわけで、はじめての *kurso* はどうにかつ

いて行けた。

自由時間に、みんな集つて歌を歌つたりした、いろいろな年令の人、いろいろな職業の人が何の隔てもなく話し合つていた。エスペラントは国籍や人種だけでなく、あらゆる人の隔てをなくすのだなあと思つた。

次の日は、チミケツブ湖へ行つた。非常にすばらしい景色で、楽しいひとときを過ごした。そしてその夜には、山や植物のスライドを見た。とてもすばらしいスライドだつた。

最後の日の朝のkursaoでは、2日間やつたことの総まとめという形でやつた。よい先生に恵まれた上に、エスペラントは、他の言語と比べて、わかりやすいので、なんとか、最後までついて行くことができた。

ほくはこの合宿で、いろいろなことを学んだ、そしてこれからエスペラントを学んで行く土台をしつかりと作ることができた。これからも、このような合宿に、できるだけ参加していきたいと思う。

斉 藤 和 子 (北見)

新聞の片すみでエスペラント講習を知つたのは今年の春でした。エスペラント語は聞いた事も見た事もなく一体どんなものだろうと本屋を2、3廻つてみましたが、この書籍はんらん時代にこれほどうしたものが溢れるばかりの本棚のどこにもそれらしきものはありませんでした。エスペラントについては全く知識のない不安のまま講習に参加しました。ただエスペラントは誰にとつても外国語という事に興味をひかれて、それと老化する頭の体操に。

講習会の日、見渡す所若くてさつそうとした方々ばかり(もう英語は卒業されて)、それにベテランの方も幾人かいらして私はすっかり圧倒され、とんでもない所へ来たような、これではとてもついて行けそうもないと思ひあぐねてしまいました。しかし先生方の懇切丁寧な指導と励ましに救われ、成果はどうあれ、とにかく出席するだけは出席してみようとなかば開き直りのような気持で戸惑いの日々の中に2月間の講習を終りました。

そして夏休みに入りイギリスから、秋にはドイツからエスペランティストを

迎え生きたエスペラントに接する事ができ、又助けられながら暮いたフランスのペンフレンドからも折返し返事がきこりして急に身近かなものになつてきました。

爽りの秋、たまたま今年北見での合宿！ 速くから馳せ参じるからにはそれなりのベテランの集まりでもあろうし、特訓学習のようきびしさも耳にしたりして躊躇したのですが、地元である気軽さだけを支えに参加しました。でも最初の不安も吹飛ぶような楽しいスケジュール。ぎつしり詰つた学習と和やかなレクリエーションであつと言ひ間に3日間が過ぎてしまいました。私達入門コース7名今までは違つた形式の学習でとても新鮮に思えました。日常のごく身近かな事を/対/で話す と言つても先生の助けやアドバイスを受けて何度も同じ事を繰り返す。初めてお会いした人達と時には語り、時には考え込み緊張の中にも笑ひのたえない授業でした。やさしい会話形式の学習を望んでいた私にはとても良い勉強になりました。初対面の人人との話のつれづれでも何か共通するものが見い出され、頑張っている仲間めぐりあえ励まされ勇気がわいてきました。

そんな集中的学習のひとつときをぬつて秋をけなわのチミケツブ湖畔へのドライブ、紅葉の錦と水面の静かなたたづまいに身も心も洗われるよう。折からの小春日和にバレーボールに興じ、皆で草わらに座つての青空大会、落葉を踏みしめてドングリを拾ひ、燃えるよ^うな真紅のぶどうの葉を見つけた喜び、夢しい思い出のひとつとして残つています。

合宿に参加して有意義な3日間を過し豊かな爽りをもたらしてくれた事を感謝しております。

坂下正幸（北見）

私は昨年7月に北見エスペラント協会（Kitami Esperanto-Asocio）が設立されたのを契機としてエスペラントを学び始めたのですが、いわゆる大会とか合宿とかいうものには参加したことがなく、今回北見で行なわれた合宿が初めての経験でした。

今回の合宿は4コースに分かれ、入門(enkonduka)、作文(esperan-tiga)、読本(japaniga)、雑談(babilada)とあつたわけですが、私は雑談コースに入りました。この雑談コースの参加人員は指導者の池本を含め、佐藤氏と私との計3名で、当初の予定より大部少ないものでしたが、池本氏立案によるクイズ形式の問答で始まり、その際の説明はすべてエスペラントでと、一寸私には話されている事自体があまりよく分らず、困つた事になつたと思つていましたが、おぼろげなエスペラントの知識で何とかかんとか通した(?)ものです。

そのクイズ形式には、CITAJOJ, EL VORTARO, ESPERANTISTOJ, ETIMOLOGIO, IDIOTISMOJ, SANO というテーマがあり、それぞれ3つないし4つの単語又は文章が並記されており、それらを正しく結びつけること及び句又は文章があり、その中で抜けている単語を入れるというような形でしたが、その内容は多岐にわたり、様々な分野の事柄がありました。私は場合残念なことにまだ雑談が出来る程のエスペラントはしやべれないのですが、一つの言葉を読み書き話すことが出来るようになるためには、やはりその必要性をいかに持続的に持ち続けることができるかということが大切だという気がします。

合宿全般にわたる感想としては、最初ですから他と比較してどうというわけにはいきませんが、2晩の合宿によるエスペランティスト同志のゲームや合唱及びトランプ、マーじゃん、花札等による交歓は、いままで知らなかつた人達やまた顔は知つていても余り話したことがなかつた人達にも一つの連帯の意識を芽生えさせたように思います。

鶴近庄次郎さんからエス文書寄贈

古いエスペランティスト鶴近さんからH E Lであててエス文書2の冊程寄贈されました。中にはローマ字の本もあり、これは私がいただく事にしましたのでまだ私の手元に置いてあります。できるだけ早く整理してLEONTODOに発表します。

(相 沢)

Raporto de "Japaniga" Kurso

En vero, mi ne ŝatas uzi la vorton "japaniga" por nia kurso, ĉar mi intencis ne "japanigi" sed "legi--kompreni" -- tuŝi la kremon de esp-a dirmaniero, spriteco de Cezaro Rossetti kaj la esprimeblecon de nia lingvo Esp. Por tio vere taŭga estis la teksto, "Kredu min, Sinjorino!" Jen ekzemple:

"Ĉu vi trovis bonan apartamenton?" 「いいアパートは見つかったかい。」

"Mezmezan"

「ああ、まずまずだがね。」

Kia simileco, komprenoble tute hazarda, al la japana! Tiu sona koincido tiel interesis min, ke mi sate uzis ĝin en nia interparolo. Jen alia ekzemplo: "Flavbekulo". Certe vi komprenas, kion ĝi signifas, ĉar ankaŭ la japana havas saman esprimon, ĉu ne? (くちばしの黄色い女、青ニオ) Jen fragmento el la teksto.

* * * *

"Tio estas surprizo; mi ne sciis, ke vi navas filon."

"Jes, mi ja edziĝis. Mi estis juna tiam -- nura flavbekulo. Mi estis feliĉaj -- turte feliĉaj; sed unu tagon ŝi malaperis kiel vaporo. Ŝi forkuris kun iu alia. La afero estis tute neatendita kaj sen klarigo. Mi ne plu eĉ flaris ŝin. Tia estas la vivo, Vik. Tamen nun mi estas kontenta -- mi veturas malpeze. Mi vivas laŭ mia gusto, sen devoj kaj sen tiuj fadenejoj, katene fortaj, per kiuj la virinoj nin ligas. Se mi ekvolas ien iri, diablo, mi iras. Nek Dio nek tondro min deturnos. Miaj libroj min distras, la mondo min amuzas Do kam'rado, adios kaj a rivederci -- kiam ajn la vento nin kunpelos."

* * * *

「こりゃ驚きたね。君に子供があったとは知らなかったよ。」

「うん。結婚したことはあるんだ。俺も若かった、くちばしが黄色かったよ。幸せだったなあ、鳩がククッとやってくるよ。ところが、ある日彼女は煙のように消えちゃった。ほかの男と逃げちゃったんだ。全く予想も出来なかったし、一言の断りもなかったさ。もえからは香(よう)として行方知れずだ。人生ってこんなもんだよ、ヴァク。だけど今はこれでいいと思ってる。---俺は、身軽にどこへでも行けるんだ。女どもが男を家庭にしばりつけるあの強い絆にもとらわれず、義務もない、自分の好きなように、俺は生きているんだ。もし行きたい所があったら、ええ、行くだけのことさ。神さまだって雷さまだって、俺の行手を阻むことは出来ないぜ。本は俺の気晴しだし、渡る世間には面白いことばかりさ。では根柢、じゃあな、金まな風が吹きよせてくられたら、また会おうぜ。」

Ankoraŭ nur kelkajn ekzemplojn mi montru jene, ĉar abundas tiaj freŝaj esprimoj.

* * *

Ŝiras mian koron, sed mi devas iri -- .

Ta, ta -- kia diro !

Estas lule komforta kafejo ĉi-proksime.

「胸が裂ける思いだが、行かにな。なるん。」

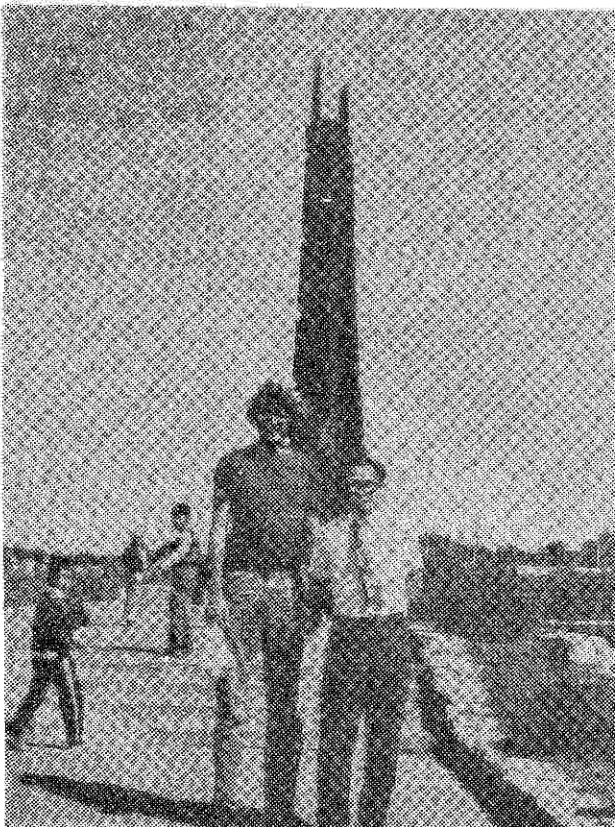
「チヤッ。何てことを…(言うんだ。)」

「とつても(わり)かごの(ように)気分のいい喫茶店が、この近くにあるの。」

* * *

Feliĉe la membroj de mia kurso estis kun sufiĉe da entuziasmo kaj kapablo por la teksto. Do, ja estas demando, kiom la gvidanto povis helpi ilin en la lernado. Ĉu mi devis montri ion pli altan, pli enhavoriĉan, ĝis la plena amplekso de mia kapablo jam ne sufiĉa? En vero, mi ne donis ian lecionon japanigan, sed nur "kiel legi" ĉi-okaze. Al mi ŝajnas, ke ni iam havu veran lecionon "japanigan", ne nur legadan. Tiam ni sentos la bezonon de pli zorgema restudo pri la japana lingvo, mi antaŭvidas.

Acuŝi HOŜIDA



La 22-an de septembro, '77.

S-ro Schleichner estas malpli alta, ol la turo!

KUN JOY MARKARIAN

Ŝin FUKUDA

La 13-an de julio mi eksciis, ke mi devos sola bonvenigi ŝin ĉe Ĉitose-Flughaveno. Tiam mi lernis Esperanton nur dum du monatoj kaj kelke da semajno. La dato de ŝia alveno estis la 19-a de julio. Imagu do mian timon! Tiun tagon mi komencis lerni multe Esperantan konversacion, ĉar verdire ĝis tiam mi estis malfervorega. Sed kiu povus perfektigi sian konversacian kapablon nur dum semajno? Unu semajno pasis terure rapide, dum mi povis nenion fari. En la 19-a matene ŝia patrino, s-ino Kimie Markarian, telefonis de Tokio al mi kaj diris, "Joy ĵus prenis aviadilon. Ŝi alvenos al Hokkajdo je la 12-a, tagmeze. Ŝi portas blankan pantalonon kaj estas 160 kaj kelkaj cm. alta." Mi tuj eliris el mian pensionon kaj rapidis al la flughaveno. Mi alvenis tien je la 11-a kaj kvardek. Ŝia aviadilo ankoraŭ ne venis tien. Poat kelka tempo anonco sciigis min pri la alveno de la aviadilo. Mi atendis ŝin kaj serĉadis ŝin. Mi serĉis la alilandanon en blanka pantalono. 1 minuto, 3 minutoj, 10, 15, finfine ŝi! Jen ŝi venis. Ŝi havis grandan valizon. Proksimiĝante al ŝi, mi salutis ŝin kun grandega nervozeco.

"Saluton! Bonvenon al Hokkajdo!"

"Saluton!"

Tio ja estis la unua renkontiĝo kun ŝi. Post kiam ni manpremis unu la alian, ni prenis buson al Sapporo. Ĉar Ĉitose-Flughaveno estas iom malproksima al Sapporo, oni veturas unu horon per buso. En la buso komenciĝis interparolo kun ŝi.

"Kiom longe vi lernis Esperanton?"

Tio ĉi estas ŝia unua demando.

"Mi eklernis ĝin antaŭ tri monatoj."

Mi respondis al ŝi lernolibre

"Nur tri! Ĉu vere?"

Ŝajnis, ke ŝi iom surpriziĝis. Tamen efektive tiam mi preskaŭ ne povis paroli Esperanton.

"Pardonu, kio estas via nomo?"

Ŝi demandis min, kaj mi respondis.

"Mia nomo estas Ŝin FUKUDA. 'Ŝin' signifas 'kreskadon', kaj 'FUKUDA' signifas 'feliĉan kampon'. 'Ŝin' estas persona, kaj 'FUKUDA' estas familia nomo."

Sed ŝi ne tuj povis memori la nomon.

"Estas malfacile memori nomon de japanoj." Ŝi diris.

Do, mi skribis ĝin sur ŝian notlibreton. Ŝi demandis min.

"Ĉu vi iam estis en alilandoj?"

"Bedaŭrinde, ankoraŭ ne."

"Do, en kiu lando vi unue volas esti?"

Unue mi ne povis kompreni tiun ĉi demandon kaj miskomprenis,

ke ŝi ripetis unuan demandon. Mi ripetis saman respondon.

"Ne, ne. En kiu lando unue vi volas esti unue?"

Ŝi parolis treege malrapide kaj emfazis la vorton 'unue'. Ĉifoje mi povis kompreni ŝin.

"Ah, tio estas malfacila demando ĉar mi volus esti en ĉiuj landoj, tamen mi unue volus esti en Brazilo."

"Kial?"

"Ĉar miaj geonkloj loĝas tie."

Tia interparolo daŭris unu horon. Je la 1-a ni atingis Sapporon. Mi demandis ŝin, ĉu ŝi ŝatas japanajn mangaĵojn, ĉar mi aŭdis de ŝi, ke ŝi ankoraŭ ne tagmanĝis. Ŝi diris, ke ŝi tre ŝatas ilin. Do, mi proponis al ŝi 'Tenpurao'-n. Ni iris al la manĝejo. En la manĝejo ŝi parolis sian sperton pri japanaj mangaĵoj.

"Antaŭe en Anglujo mi ne ŝatas marherbon kaj ne povis manĝi ĝin. Sed mi nun ŝatas ĝin. Mi manĝis angilon. Ĝi estis tre bongusta, tamen mi ne povas ĝian enhavon. -----"

Kaj mi miris, ke ŝi tre bone uzas manĝeĵonetojn, hasion. manĝi

Poste ni promenis en Odori-Parko kaj vizitis mezlernejon, kie estas esperantisto-instruisto, s-ro Cubaki, kiu gvidas la Esperantan klubon de la lernejo. Tie ni okazigis lumbildokunveno pri la vivo de lernantoj en Anglujo por geknaboj de la klubo. La kunveno tre interesis ilin. Post la kunveno ili petis ŝin skribi sian nomon kaj adreson sur iliajn kajerojn. Do, ŝi devis skribi por ĉiuj geknaboj, prokusimume dudek geknaboj. Verŝajne tio estis iom peza laboro por ŝi. Ŝi kriis, "Ĉu mi devas fari por ĉiuj?!" Kaj ni iris kun s-ro Cubaki al la kafejo, kie estis atendonta s-ro Saito. En la tago ŝi tranoktis en lia hejmo. Post kiam ni iom parolis, mi adiaŭis ŝin antaŭ la kafejo. Ŝi aspektis laceta.

Tio estas treege bona sperto por mi. Unuafaje mi povis auskulti paroladon, kiun denaska Esperantisto faris. Kaj interparolo kun ŝi estas bonega ekzerco, ĉar ŝi ne parolis en japana lingvo. Kiam mi volis diri iun aferon, mi devis diri ĝin nur en Esperanto! Tamen poste, kiam mi renkontis ŝin en Tokio, ŝi tiam iomete parolis japanan lingvon, kaj tiam mi trovis, ke ŝi bone scias multe da japanaj vortoj. Ŝi parolis Esperanton tiel flue kaj rapide kiel sian gepatran lingvon. De tiam mi firme kredas, ke Esperanto estas vivanta lingvo. Kaj samtempe mi forte sentis, ke konversacia ekzerco mankas al mi, kaj ke mi devas multe, pli multe lerni Esperanton.

La 27-an de julio mi feliĉa havis ŝancon veturi al Tokio kune kun ŝi. Matene je la 8-a ni redevuis ĉe filio de JAL (Japan Air Line) en Sapporo. Tie ni povis tuj rezervi sidlokojn de aviadilo. Ĉar mi ne matenmanĝis, mi trinkis lakton ĉe Ĉitose-flughaveno. Kiam ni eniris

en la aviadilon, ŝia mansaketo sonorigis avar-ton, kiu preventas aviadilo-forrabon (hijacking). Tamen kompreneble ŝi havis nenion danĝeran. Nu, mi nun rememoris. Ŝi ofte diris, ke japanoj tro ofte uzas la vorton 'kompreneble', kaj ke tio estas nekomprenebla. Sed en tiu ĉi okazo la vorton 'kompreneble' uzi estas trege kompreneble, ĉu ne? En la aviadilo okazis nenio eksterordinara. Tamen en Tokio granda katastrofo atendis nin. Apenaŭ ni alvenis al Haneda-Flughaveno, mi trovis la flughavenon pli plenplena de homoj ol ordinare. Post kelkaj minutoj anonco informis min, ke la unurelvojo-tramo (monorail) difektiĝis, kaj ke se oni volas iri en la centron de Tokio, oni devas veturi per taksio aŭ buso. Sed la haltejo de taksio kaj buso estis tro plenplena de homoj. Dume ŝi telefonis al sia patrino, sed ŝi plendis, ke telefonoaparato malfunkcias, kaj ke ŝi ne povis telefoni. Do, mi telefonis anstataŭ ŝi. Kio vi pensas, ke la kaŭzo estis? Tuj evidentiĝis, ke ŝia patrino estis interparolanta. Joy diris, ke ŝia patrino ĉiam longe parolas per telefono. Sed tio je estas komprenebla, ĉar ŝi delonge ne estis en Japanujo kaj krome ŝi ne povis forlasi sian hejmon pro tio, ke ŝi devas zorgi sian infaneton, Nikoro. Do, estas nature, ke ŝi longe parolas per telefono kun siaj amikoj kaj konatoj. Ĉiuokaze ni devis iri al ŝia hejmo ĉe Kiĉiĵoĵi kiel eble plej rapide, ĉar ŝia patro, s-ro Raif Markarian, estis venonta tiun tagon el Anglujo al Japanujo. Ni prenis taksion kaj iris al Kamata-Stacidomo, ĉar tiu stacidomo estas la plej proksima de la flughaveno. De tie ni veturis al Kiĉiĵoĵi-Stacidomo per tramo. Joy kondukis min al ŝia domo de tiu stacidomo. Unue ni perdis nian vojon kaj iom ĉirkaŭiris tiun stacidomon. Fine ni atingis la domon senakcidente. Tie en la domo feliĉa mi renkontiĝis kun s-ino Mimie Markarian kaj f-ino Nikoro. Nikoro estas dujara fratino de Joy. Ŝi estas aminda infaneto. Krom tio ŝi ja parolas espernate! Kaj ni kune tagmanĝis. (Verdire mi manĝis angilon. Ni estis tre feliĉa. Dankon Mimie!)

Tio ĉi estas la fino de akompano kun Joy. Ĉe la fino de tiu ĉi fiaseo mi tre dankas ĉiujn en familio Markarian pro ilia sinpatieco.

(Sapporo 12, septembro 1977)

La memoroj por la germana verda paro Sona

H. Kodama

Septembre, post pli ol du jaroj da restado en Tokio reveninte Sapporon mi telefonis al Hokkajda Esperanto-Centro en la kvartalo Hiragiŝi-Tojohira, kien eĉ unufojon mi ne vizitis ĝis tiam. Tiu dato estis la merkreda kunsido. Mian telefonon prenis la ĉarma fraŭlino Ŝibata (nun ja, eksfraŭlino s-ino Todome) kaj kun komplimento ŝi anoncas. " ni, sapporanoj kore atendis vin reveni ! Ĉivespere ni havas la bonvenigan kunsidon por la germanaj gastoj ges-roj Sona, kaj plie ankaŭ la rara gasto s-ro J. Arima el la urbo Oomija. Al ni estas granda ĝojo aldoni la bonrevenigan kunsidon por s-ro Kodama ! Venu vi plej rapide !! "

Dum mallonga veturado de l' subtera trajno direkten al Hiragiŝi momente mi reiris min antaŭ 25 jaroj (en la tempo mi, ankoraŭ fraŭlo agis sub la gvido de s-ro Arima por la prospe-rigo de Sappora Esperanto-Societo) kvazaŭ mi vidus karmemoran kalejdoskopon noktiĝanta el fenestro de trajno. Ja, por mi estas miro, ke apenaŭ mi povas renkontiĝi kun li eĉ ne en Oomija sed en Sapporo, ĉar malgraŭ la najbara loĝloko (Jono kaj Oomija) de mi kaj li almenaŭ ni sinreciproke tenadis nur telefonan kontakton.

Mi jen vidis karajn kaj nekonatajn vizaĝojn de l' kunvenantoj, apenaŭ kiam mi eniris la ĉambron de Esp. Centro, s-rojn Aizaŭa, Arima, Kimura, Ŝitoo, Todome, la studentojn Satoo, Hukuta kaj aliajn, el kiuj ges-roj Manfred Sona kaj Ikuko Sona-Oomoto montris al mi afablajn rigardojn. Kompreneble en la kunsido plenplene regas la verda atmosfero kaj floradas interbabiladoj bagatelaj kaj interesaj sinreciproke en nia kara lingvo Esperanto.

La te-ceremonion prezentis s-ro H. Aizaŭa, kiu jam havas ĝian diplomon, kaj poste ankaŭ ĉiuj kunvenantoj ĝin partoprenis, jen iuj kriples kaj aliaj lerte. Precipe s-ino Ikuko Sona sperte manipulis ĉerpilon, te-kribrilon kaj te-tason. Jen ŝia edzo Manfred kun mieno de miro kaj kontento observas la konduton de sia pleja amatino.

La sekvantan tagon, mi havis la denovan renkontiĝon kaj la tagmanĝon kun ili en mia oficejo kaj en restracio. Niaj paroltemoj estis variaj, ekzemple pri siaj familioj, spertoj de kongrespartopreno de loka, landa kaj UEA, aŭ pri germana literaturo k.t.p.

Dum renkontiĝo mi rimarkis min inklini por ŝi ankoraŭ restanta studentinecon. Fojfoje naskas en mi demandoj koncerne ŝin: Kian reagon montris ŝia patro, kiam sia filino foriris eŭropon? Kiamaniere li akceptis ilin en sia hejmo por la unua veno post ilia geedziĝo? k.t.p.

Sendube mi kaj ŝia patro apartenas al samgeneracio. Tiam ankaŭ mi plej baldaŭ devis sendi mian filinon tre malproksimen pro la edziniĝo. Jen kial la juna Ikuko Sona antaŭ mi projekcias kvazaŭ vidi mian filinon. Venis tempo adiaŭi mi kaj la juna paro. Dezirante ilian sendanĝeran kaj fruktplenan vojaĝon mi donacis malgranda sumo da mono. Tiam tuj sekvis mia parolo, ke volu akcepti ĝin samkiel donacon de sia patro.

Jam pasis pli ol du monatoj de kiam mi kaj ili disiĝis. Venis ŝia letero el la urbo Fukujama, kiu komence dankas pro mia patreca zorgo kaj poste sciigas pri morto de sia vera patro. Estas kondolence por ŝi! Tre bedaŭrata forpaso de ŝia plej amata patro! Tamen, momente kuris mia penso, ke ŝia

patro pace dormas vidinte la firman feliĉon de ŝi kaj ŝia aliancia edzo kunligitaj de l' komuna ideo.

(fino)

(Venis al Hokkajda Esperanto-Centro la dankleteroj de s-ro Manfred kaj s-ino Ikuko Sona. Jen malsupren estas iliaj.)

Fukujama, 08-12-1977

Karaj samideanoj !!

Ĉu Sapporo estas jam blanka ? Kvankam ni revenis al Fukujama en oktobro, tamen nun finfine skribas al vi. Ĝis nun mi spertis multe da aferoj. Sed mi tute ne forĝesis vian varman bonvenigon. Kaj ni esperas, ke ni povos bonvenigi vin ĉiuj iam.

Vere nia vojaĝo en Hokkajdo estas granda ĝojo; vidi pitreskajn lokojn kaj renkonti esperantistojn.

En fino de novembro Manfred reflugis al Germanio, kien ankaŭ mi en la 18a de januaro alflugos.

Ĝis nia revido, fartu bone !

Kun multe da salutoj. Via Ikuko Sona-Oomoto

(el kristnaskokarto)

Ĝojan Kristnaskon kaj

Feliĉan, Prosperantan Novan Jaron 1978 !

Karaj gesamideanoj en Sapporo !

Mi volas kapti la okazon de Kristnasko, por ankoraŭfoje danki al vi ĉiuj por la bonega gastigo de mia edzino kaj mi dum nia vojaĝo en Hokkajdo en septembro ĉijare.

Mi estis tre ĝojaj, ĉar ni povis renkontiĝi kun via grupo. Nuntempe jam ekde decembro mi denove estas en Germanio, kaj volonte memoras al la tagoj, kiam ni estis gastoj en la Hokkajda Esperanto-Centro.

Bedaŭrinde mi ne havis fotojn de via grupo. Mi memoras, ke dum la te-ceremonio iu samideano multe fotis. Mi havas grandan peton sendi ilin al mi. Se tiu eblus, ni estus tre ĝojaj kaj dankaj, ĉar ili estas por ni valoraj memoraĵoj. (* mi, Kodama plenumis lian peton)

Se iu el vi intencos viziti Germanion, tiam bonvolu esti niaj gastoj ! Ni ĝojus !!

Sincere Manfred Sona

{ La 21-an de septembro, '77. }

S-ron Schleicher ni konvenigis varme.

かねて聞きおよんでいたデンマークからの長身の客人が私達の前に姿を現した。日頃集りのかんばしいとは言えない Es センターも今日は満席御礼が出るほどのにぎわいだ。短いスピーチをばさんでの自己紹介のあと Babilada. E-isto の常として話題は地球の表裏を駆けめぐる。まずは彼の身長の話、そしてシベリヤ鉄道で同じ箱に乗り合せた *franca fraŭlino* の話、はたまた兵役の話 *h.t.p.* (とは言えそのような話題が出ているらしいとわかるだけだが……)

特に興味を持って聞いたのは兵役免除の条件で、幾つかあるうち医学生はわかるとしても図書館員もそのなかに入るのはちょっと理解できなかった。しかしそれは学術・文化を大切にするお国柄によるのだろうと拝察した。彼が医学を忘れているのは兵役逃れのようにも見受けられたが……。せつかくの客人だ俺も一言しゃべらなげや……かねて用意の原稿 (もちろん Es 文) を取り出した、以下。

約 60 年前 北海道知事は乳牛の導入による酪農の発達を図りその先進国である あなたの国から酪農家 2 戸を招き、一戸は 5 ヘクタール 他は 15 ヘクタールとタイプの異なる規模の見本経営をしてもらいました。北海道の農業はその時から酪農を租入れ、更に馬を用いたものとなり、大きく発展をとげました。しかし現在農家の馬はトラクターに代り、競馬場と動物園以外で馬を見ることはできなくなりました。

この哀れな馬連は *Ladmanigo* になってしまったのです。

"鐘詰になった" が オチ の つもりであつたが 反応なし。残念。

(La 22-an de septembro, '77.)

S-non Schleicher ni quidis al la muzeo per aŭto.

快晴。S君、佐藤君と三人で開拓記念館へ出かける。彼の身長は私より43cmも大きい。果して車に乗れるのだろうか？ 案ずるより生むが易しとが、無事に納った。しかし車の前から見ると彼の膝頭がフロントガラスの下側に見えているではないか？ 身長164cmと207cmの大きく違う部分は足の長さであることを知らされた。

Oni malis al mi, ke mia aŭto estas aŭteto kaj aŭtato. Sed ĝi kuras pli rapide ol mi men. Ĉu vi ne heredas?

Jes mi heredas kaj ĉi tiu aŭto estas spicie granda.

ここでミカーの速さと大きさは国際的に認められた試であり三菱の社長は喜ぶことだろう。私が走るより速い車は記念館到着、まずは100年記念塔をバックに記念撮影、さすがのS君も100m塔には及ばないのだ。思い知ったか？ 佐藤君と二人ここで劣等感解消。

佐藤君の説明で館内一周。Antaŭ in ekspoziciotago S-ro Sato diris al li ke ĉi tio estas tomsigno de ajno... viro... virino. 「なるほど、なるほど」と内心感心し私S君はいかにも見れば『=ヤリ』(Esではなん^と笑うのかなー) 以上

—斎藤記—

☆ あのひと、この人

○ 大町文章君、アルゼンチンから一時帰国 ○

12年前、札幌エスペラント会の会員であり、当時から海外雄飛に燃えていた高校生大町君は、学校卒業と同時にアルゼンチンへ壮遊の旅に立ち、以来10余年ぶりの帰国、スペイン語圏で鍛えられたあつてエスペラントもなかなか磨きがかかっている。

日本滞在中私達の合宿や北海道大会に姿を見せ楽しい思い出のページを画してくれることを望みたい。

(住所: ⁰⁰²札幌市北区篠路町大平 82-124)

○ 俵谷(旧性坂井)絹子さん 再びエス語学習に燃える ○

10年前、札幌エスペラント会の熱心なサミテアニーノとして活躍されていた彼女も世の常にさからうことなく結婚後は家計のきりもりや育児などに追われ、エスペラント界から遠のいていたが、いくらかうんのお子さんから解放された現在、もう一度エスペラントを学習し各国の主婦と文通してみたいと、8-20児玉に手紙を寄せている。

文中のところどころにエスペラントの単語をおりませ、これを読む彼は“10年余の長い休眼にもかかわらずエスペラントが彼女の心のなかに生き続けていた”と感激することしきり。

(住所: 065 札幌市東区北14条東1丁目)

○山崎久蔵翁逝く○

藤学園大学教授としてご活躍中、よくわかエスパーント界に姿を見せていた山崎さんは 7~8年前に退官され、郷里舞鶴市で静かな余生を送られていた。この度ご家族の方からの便りで昨年4月高令で(80才以上か?)他界されたことを知った。

温和で常に微笑のたえることのない好又爺山崎さんの往時を思ひ懐しむ会員も数多く、遅ればせながら北海道エスパーント連盟の名で会長から弔意の手紙を家族へ送った。

○道内エスパーンチスト3人が今夏海外旅行へ○

小樽市、山賀勇氏、札幌市、児玉広夫氏が今夏開催の第63回世界エスパーント大会(アルカリア、バルナ市)に参加する。お二人とも学会企画の「世界大会参加旅行団」に部分参加とし、大会終了後山賀氏は寺岡の眼科医学の用務で、児玉氏はオランダの Woessink 夫妻の乗用車で、それぞれ東欧数ヶ国を見聞してくるが。

また、小樽市の高橋達治氏が今夏8月14日(月)から27日(日)までの2週間の旅程で中国に派遣される「日本エスパーンチスト中国訪問団」の一員に推薦され、近く正式に決定される見通しである。

このことは北海道エスパーンチストにとっても大きな喜びであり、本年9月下旬の北海道大会にはご三人の興味深い体験談が聞かれるものと期待している。

「カムチャッカ 縦断記」

昨年産ぶ声をあげたばかりの *Japana Alpista Montoamanta Asocio*, JAMA 北見支部は、北見エスプラント協会と協力して、ステン・ベルクマンの名著 "Tra Sovaja Kamčako" (1932年、ストックホルム刊) の全ページをコピーしました。スウェーデン語からエスプラント訳された「カムチャッカ縦断記」です。時事通信社から日本訳も出ていましたが、今は絶版にようです。

できるだけ原本をそっくり写そうと欲張り、276ページをすべてコピーし、付録の貴重な地図はもちろん、表紙の写真まで苦心して写しました。コピーから製本まで、全て会員の協力でできあがったものです。手製のため表紙にはやや見劣りのするものもありますが、肝心の内容はむしろ、原本よりきれいに出来あがっています。

数多くの写真も、思いのほかうまくコピーできました。中には原本より見やすいものもあります。本文はもちろん、写真、地図とも本当の旅を愛する人々には、こぼなく貴重な資料となると思います。

とくに北方諸民族との出会い、オホーツク海からカムチャッカ半島にかけての日本人の進出ぶり等を知るにも興味深いものがあります。昨年スタアカウシベ(大雪山)で開かれた JAMA のオ
1 回総会と、同支部の中知床山脈縦断、それに北見^{北見}市で開かれた北海道エスプラント連盟の秋の会宿を記念してコピーしたもので、25都しか作っていません。

手許に少し残部がありますので、本当に読んでみたい、と思う人におわけしたいと思います。申し込み先着順に装丁の良いものを送ります。ご希望の方は、送料とも2200円を添えて下記へ。

090 北見市 北7条 西1丁目10,

JAMA 北見支部 事務局

池本 貞付

編集後記

▷ 昨年の北海道大会以後 すっかり休眠状態を続けていた *Leontado* もやっとオ62号としてお送りすることができました。

札幌も7月初旬とはいえ、例年になく暑さの中、今このセンターではいよいよ目次作成の段階に入っています。

今回の編集を初めて手がけてみて、今更のように 今まで編集をつかさどった *Shino* 沢谷のご苦労がどんなものであったか、顧りみて申し訳ない気持ちです。

(児玉)

▷ "*Leontado* の編集をしろさい"といきなり言われてから6ヶ月くらいたったろうか。とにかくこれが新編集委員として世に送るオ一号です。

内容的に多少無理をしたというよりは 否定出来ません。これからは定期的に出版したいと思っています。

(*falica kampo*)

▷ なにごとも *unuasperta* はむっかしいもの、次回からはもうすしし要領よくやれるだろう。

(斎藤)

北見エスペラント協会移転

北見エスペラント協会(KEA)は5月6日、これまで例会、講習会等に使っていた北見文化会館(北見文化連盟事務局)の移転により下記に移りました。

壁新聞 "Ohocka Stelo" や KEA 文庫の本棚、本等の "無人販売器" もすべて移しました。

一階会議室が新しい例会場で、これまでのへやより小じんまりしていますが、それだけにむしろ当協会にはぴったりのなかなか良い雰囲気です。もちろん、当協会だけが独占するへやではありませんが、例会の回数によって主導権を握るつもりです。

それに、だれもが自由に入出りできる場にしてエスペラント活動の本拠を置くべきだというのが私達の考えです。今後ともよろしく。

nova adreso : 090 北見市北4条 東4丁目

市立北見文化会館内 北見エスペラント協会 (tel 0157-23-0910)

N. B. 例会は毎週水曜日 7時～9時

休館日は毎月1, 3, 5 木曜日

市街地の中心部にあり、駐車場も広いので便利。



JAMA 北見グループ

'78年夏山行計画

昨夏結成以来、次々と山行計画が *anaj* から提案され、たがずに実行、息をつくひまもないほど。"Hejma Grinpeja" の知床連峰、斜里岳、大雪山系を中心に、夏山から冬山、そして春山へと、ほとんど一週間おきに山へ入っていた。昨年の主な山行は別表の通りだが、その報告をすする間もなく、今年にはいつからも、北大雪天狗岳スキー登山(2月4日~5日)、斜里岳登頂(2月25日~26日)、南知床海別岳スキー登山(3月26日)、ニセイカウシユペ登頂(5月6日~7日)等、幾つかのヤマを踏んだ。

このあと、8月中旬までの計画は次の通り。各地の *Samintersulo* との交歓、合同登山も望んでいるので、希望者は下記事務局まで連絡を。

7月14日~15日 JAMA 苫小牧グループと合流予定

7月29日~30日 知床硫黄山(ウトロ側カムイワッカから三本峰平空溪へ)

8月11日~15日 日高カムイエチカウシ(前半は沢登り、後半は徒走、ヒグマ出没の危険地帯、JAMA 名古屋支部へ参加)

このほか、ニセイカからシユペの岩稜ルート、北知床縦走(積雪期、山スキー使用)も計画中。

Adreso de la oficejo

090 北見市 北7条 西1丁目10

池本 気付



JAMA 北見支部

Monto Hajaĉine

Monto Hajaĉine, kiu elstaras ĉe la mezo de Kitakami montaro, estas 1914 metrojn alta super la marnivelo, kaj unu el tri famaj montoj en Iŭate gubernio. Laŭ "Rakonto de Tōno", kies aŭtoro estas famekonata folkloristo Kunio Janagida,

Pratempe unu diino descendis ien kun siaj tri filinoj. Ŝi diris al ili, ke ŝi donos la plej bonan monton al tiu, kiu songos ĉi-nokte la plej belan songon. Meznokte unu sankta petalo defalis de la ĉielo sur la brusto de pliaĝa fratino. La plej juna, kiu hazarde vekigis siatempe, surmetis ĝin sur si. Jen kial Mt. Hajaĉine apartenis al ŝi, kaj pliaĝaj ricevis respektive alian monton. Sopirante la legendplenan monton, jam pasis kelkaj jaroj. Bonŝance en lasta somero mi povis viziti tiun monton kun la amikoj.

Vilaĝeto Dake estas enirejo de Mt. Hajaĉine. Elirinte el aŭtobuso, ni ekiris kun dorsosakoj sub serena ĉielo. Hieraŭ pluvego tie kaj ĉi tie detruis vojon. Akvoleviĝo fluigis etan ponton, pro tio ni devis piediri superflue pli ol ses kilometrojn. Vojo iom post iom plialtiĝis. En la arbaro de blanka betulo kantas ugvisoj. Subite maldekstre antaŭen aperis alta monto trans valo. Grizaj rokblokoj elstaras el verda deklivo. Gvidanto diris, "Jen estas Hajaĉine." Sed la supro sin kaŝas en la nubo. Diino de Hajaĉine ŝajnas hontema aŭ malica. Post unu kaj duonhora marŝado, ni atingis tedumejon, Kaŭarabo. De ĉi tie kruta vojeto iras serpentume al la supron laŭlonge de valo. Ni mal-supreniris al riverbordo.

Laŭirante ŝtonojn, ni antaŭeniris iafoje dekstran bordon, aŭ maldekstran. En riverujo grandaj aŭ malgrandaj ŝtonegoj kovritaj de muskoj amasiĝas. Veproĵ de ambaŭ bordoj igas vidkampon mallarĝa. Nebulo descendis de la supro, pro tio en la valo fariĝis iom malgaja. Pro senvento kaj humideco mi traŝvitiĝis. Vojeto pli kaj pli fariĝis kruta, mi spir-

egante ekprenis randon de roko. Kiam ni transiris unu eĝon, tie fonto ŝprucis el la roko. Estis la lasta fonto, Kobekori. Ŝajnas, ke ni atingis arbarlimon, altaj arboj malaperis kaj plantfazo ŝanĝiĝis al rampinoj. Tiam ni renkontis alian karavanon, kiu venis malsupren. Ili diris al ni, "De ĉi tie fariĝos pli penige." Mi iomete perdis kuraĝon.

Klino de deklivo, kiu similas al ŝtonhakejo estas pli ol kvar dekgradoj. De tempo al tempo, iu senatente ekpaŝis, ŝtonoj krakante disfalis. La mezsomera sunbrilo varmigis ŝtonojn, vizaĝo sentis varmon kaj ŝvite disgutis ĉe la piedoj. Pezo de dorsosako iom post iom mordis ŝultrojn. Sed entia peniga batalo tiuj, kiuj konsolas nin estas mirindaj pejzaĝoj kaj alpaplantoj. Speciale ĉarmo de la lasta alvokas min al montoj. Hajaĉine estas trezorejo de ili. Tiu estas tiel malnova teologie, ke glacia epoko alportis nordajn plantojn al la supra zono. Tial troviĝas la plantoj, kies ununura hejmloko, aŭ suda limo estas ĉi tie. Ĉiu monto havas planton, kiun reprezentas. Okaze de Hajaĉine, ĝi estas "hajaĉine usujukiso". La blankaj petaloj, kiuj similas al edelvejso, estas amindaj kaj elegantaj. Alie, "nambutoranoo", "hime-kozakura", "mijama-ŝiogama", "ĉiŝima-huro", "takane-sumiré", k.t.p. Ili floras blanke, rozkoloro, flave, kaj purpure, dum mallonga somero de altmonto. Kiam oni renkontis kun ili ĉe la breĉo de roko, por momento forgesos lacon. Estas memorinde, ke ili ne povas flori bele en la homregno tial, ke ili ĝuste apartenas al la ĉielregno.

Paŝo post paŝo, spiregante mi min direktis al la supro. Ŝajnas, ke kelkaj anoj jam transiris al lastan eĝon. Mi postkuris ilin, sed kiam mi preterpasis okdekan markon, (Por grimpantoj oni starigas signaldiskojn ciferitaj de la montopiedo ĝis la supro) troa laco kaj malsato haltigis

mian pluan. paŝon. Tempo jam alproksimiĝis al dektria horo. Mi manĝu tagmanĝon. Mi sidiĝis sur rampinoj de kruta deklivo. Pro troa laco, spite de malsato, mi sentis apetiton ne multe. Mi manĝis iom da panon kaj kukon kun akvo. La ĉielo iom sereniĝis. Malproksimaj montoj malklare vidiĝas en la nebuleto. Jen videble jen nevideble, bruna zono, kiun ni laŭiris, longe kuŝas en la malluma verdo de vasta arbaro. "Kiel bone mi grimpis", mi monologis. "Kion vi faras?" Vicgvidanto tiam alvokis min de la malsupro. "Mi nun manĝas," mi kriegis.

Post tagmanĝo mi denove grimpis kaptante branĉojn aŭ radikojn de rampinoj. Baldaŭ mi renkontis ŝtonegon elstarantan kaj kiam mi preterpasis ĝin la supro estas antaŭ mia nazo. Mi fine transpasis la lastan eĝon. Mi rapide supreniris kaj stariĝis sur la supro. Tie troviĝis eta ŝtonfarita templo, kaj pli granda ruĝkolora kultejo. Antaŭ ĉio mi devas saluti al la diino de ĉi tiu monto, mi pensis. Mi tintis sonorilon pendantan antaŭ la kultejo. Mi kunpremis manojn. Sed nebulo nerimarkite denove kovris la supron. Vidkampo subite malboniĝis kaj ekpluvetis. Mi nun estas sola. Danĝero estas proksimiĝanta al mi. Ŝajnas, ke diino de Hajaĉine hodiaŭ ne estas bonhumora. Mi komencis malsupreniri kiel esti pelita. Baldaŭ mi renkontis kun amikoj, kaj reciproke helpante nin direktis al la montopiedo. Felice vidkampo ne tro malboniĝis. Sed malsekiĝintaj ŝtonoj gratigis piedojn. Malsupreniri estas pli penige ol supreniri. Fakte survoje de malsupreniro multaj akcidentoj okazis. Eltenante dolorojn de ambaŭ genuoj kaj piedfingroj, mi singardeme rapidis al la montobazo. Pli kaj pli forte pluvis, tamen povis esti graco de monta diino, ke ĝis kiam ni revenis al Kaŝarabo ne fariĝis pluvego.

Fino

T. Iĉikaŭa

Ni interŝanĝu sonbendon kun eksterlandaj Esperantistoj !

Ŝin FUKUDA

Oni diras, ke eĉ kiu bone parolas Esperanton, malofte bone skribas ĝin. Mi ne scias, ĉu tio estas vera aŭ ne. Tamen ŝajnas al mi, ke oni ne povas apliki tion al japanaj Esperantistoj. En Japanio kiu bone parolas, ĉiu bone skribas. (se tio estas mia miskompreno, pardonu min.) Kial? Laŭ mia opinio, ĉefa kialo estas, ke komercantoj ne kuraĝe parolas ĝin, kaj krome, ke ili malofte havas ŝancon paroli ĝin kun eksterlandanoj. En ĉi tiu punkto kelkaj (multaj?) insistas, ke ili parolu Esperanton inter si. Ili ja pravas, sed tio estas nur logiko. Imagu do kio okazos kiam kiuj ne bone parolas, tiuj kolektiĝas. Ili certe penos paroli Esperanton, tamen ili iom post iom laciĝos kaj haltos kaj haltos kaj finfine ekparolos japane. Jen mi proponas, ke ni interŝanĝu sonbendon kun eksterlandaj Esperantistoj. Kiam oni intencas sendi sonbendon al sia korespondanto, ili devas unue prepari manuskripton kaj due parolante Esperanton surbendigi ĝin. Skribi leteron signifas, ke oni ekzercas sin en skribado, sed interŝanĝi sonbendon signifas, ke oni ekzercas sin ne nur en skribado sed ankaŭ en parolado. Cetere oni povas aŭskulti sian korespondanton paroli Esperanton! Kaj mi estas certa, ke oni trovas, ke estas malfacile skribi manuskripton, kiu egalas al eĉ 10-minuta parolado. Do, estas bonâ rimedo ankaŭ plenigi sonbendon per kanto kaj muziko kiuj karakterizas sian nacion.

Mi mem lastatempe interŝanĝis sonbendon kun mia hungara korespondantino. Okaze de Z.a festo de 1977, mi surbendigis kelkajn kantojn kaj sinprezentojn de ĉeestantoj kaj sendis la sonbendon al ŝi. Kvar monatojn poste mi ricevis de ŝi sonbendon kiu enhavis krom privata afero ankaŭ prezenton de ŝia grupo faritan de la prezidantino. Nun mi prezentos tiun prezenton.

Karaj japanaj geamikoj! Mi estas Malgarina Ripszan, prezidantino de Junulara Esperanto-Grupo vilaĝo Boly. Nia grupo kun granda plezuro aŭskultis vian sonbendon, kiun vi sendis al Ilona Kiss. Ankaŭ mi sendas al vi kelkajn niajn ŝatatajn kantojn. Inter ili estas kaj internaciaj kaj hungaraj popolokantoj. Mi prezentas al vi nian grupon. Ĝi havas ĉirkaŭ 20 anojn, de 18 ĝis 16 jaraĵn, ĉefe junulinojn. Ni kunvenas dufoje en semajno. Dum la kunvenoj la komencantoj lernas. Ni pregresantoj preskaŭ 10 personoj, jam havis bazgradan ekzamenon kaj nun en majo ni deziras fari mezgradan ekzamenon en Esperanto. Por tio ĉiun duan dimanĉon ni vizitas Esperanto-kurson krom la regulaj kunvenoj. Dum tiuj kursoj ni studas movadohistrion, gramatikon, literaturon originalan kaj tradukitan. Dum la grupkunvenoj ni okpiĝas pri la materialo de tiu ĉi kurso. Lerni kune estas pli interese kaj utile ol sola. Sed ni ne nur lernas, sed ofte ni faras interesajn programojn, ekzemple konkursojn prelegojn kaj ni organizas ekskursojn enlandajn kaj ekslerlandajn. Anoj de nia grupo jam estis en Bulgario, Pollando, Jugoslavio, Italio, Francio, Hispanio, Svislando, Grekio kaj GDR. Post unu monato ni partoprenos Esperanto-Renkontiĝon en Leipzig en GDR. Ni veturos per aviadilo. Nia somera plano estas partopreni TEJO-Kongreson en Veliko Tarnovo kaj Universalan Esperanto-Kongreson en Varna. Preskaŭ tuta grupo intencas veturi tien. Kaj kompreheble ni havas tre bonan kontakton kun Esperanto-grupo en Osieck, ĉar nia vilaĝo situas proksime al la jugoslava landlimo kaj ni facile povas viziti unu la alian. Ni ofte faras komunajn programojn kun ili. Nun mi finas mian raporton pri la vivo de nia grupo. Mi salutas vin. Mi esperas, ke ni povos renkontiĝi ie en Esperantujo. Ĝis!

低くひくく近い所で (3)

面白くないこと

A・H

エスペランティストの集会で自己紹介をする。" mi estas fame konata, en nia grupo !"とやる。皆がわつと笑う。これはエスペラントだから面白いので、日本語に訳したらどんなものかね。

昔ボリス・カーロフとベラ・ルゴンの映画で、同じような場面を見た。サブタイトルでは " 有名と申しましても〇〇新聞社の中だけの事ですが" という事で面白くもなんともない。

親しい間柄なら "Lasu al mi almeton" と言われたら "Bonvole ! と差出す。マツチを受け取つて "Koregan danketon!" とこをえる。こんなのは日本語にどう訳せばよいのかね。エスペラントでは面白くてもどうしてもならないものが沢山ある。

シエクスピアのものには vortludo がやたらにある。これが英国人のユーモアや何かの原でなつてゐるらしいが。ザメンホフ訳のハムレットではそれらの vortludo は全部黙殺してある。それであれだけの名訳が出来たのだから、その点 vortludo を問題にするなら別の判定も出来る事だろう。

所で気になるのは "Plej bone ridas kiu laste ridas" だが、最後に笑う者は最もよく笑うとよくつかわれるが、何んとか名訳はないものかね。最もよく笑うという言葉は直訳くさくて、日本人(おれだけかな?)にはなじめないようで面白くない。大分前から使われているから皆さんは別に気にならないのかね、

Inter ludoj kriiu lupe. 「郷に入らば郷に従え」というような名訳はないものかね。

Leontodo n-ro 61 を読んで

Lingvaj problemoj に関する議論を特に興味深く読ませていただきました。(Hoŝida 氏、Mukai 氏、Ikemoto 氏などの)

「Kitami Esperanto-Asocio」問題に関連して、ぼくは、こんなことを思い出しました。1975年の夏、Dao Anh Kha 氏の通訳として、原水禁大会の国際予備会議に参加しそとぎのことです。会議で交されるやりとりを通訳しようとしてたちまち暗礁にのりあげてしまつたのですが、その理由の一つに、エスペラント式の名称が長いという問題がありました。

こういうやりとりには、「総評」「日教組」「新日本婦人の会」というような組織の名前とか、条約の名称だとか、会議や集会の名称だとか、エンエンと出てくるのですが、それを何んとかかんとか(わかっても、わからなくても)エスペラントにおきかえなければならないわけです。(わからなかつたら、相手は、それをメモしておいて、あとで誰かに聞くこともできます)英語の通訳はどんどんやつていました。略語や愛称が確立しているということもありますが、英語では比較的簡単に言いなおせるということも見逃がせません。

もし、エスペラントが、実際の世界でどんどん使用されるようになつたら新聞の見出しに使われる単語のように、文法的に正確でなくても、そのものを簡潔に暗示する言葉の体系がどうしても必要です。エスペラント界にも、ささやかながら、そういう実用の世界があります。MEMの国際的な会議での議論などは、その例だと思えます。そこでは、「La Sekcio de la Mondpaca Esperantista Movado en Japanio」のかわりに MEM-Japanio (MEM・ヤパニオと読む)と言つたり「La Tokio-Kongreso」のような言い方をしたり、Japana MEM-komitato (MEM・コミタート)のような言い方をしたりします。専門的な用語でも、その分野の人にとつてみれば日常用語のわけですから、こういう言い方が自然に発達してくるのでしょう。

そういう意味で、ぼくはエスペラントの実用の中から発達してきた言い方に、できるだけ市民権をもたせて行く考え方に賛成です。

栗 田 公 明 (三島市)

第42回北海道エスペラント大会 ごあんない

とき 1978年9月23日(土・秋分の日)～9月24日(日)

ところ 宿泊及び前夜祭:

苫小牧市高丘26 選手強化合宿所

Tel. 0144-34-4872, 0144-34-6748

大会:

苫小牧市旭町3-2 市民会館

Tel. 0144-33-7191

日程 9月23日(土)選手強化合宿所にて 前夜祭

15.00 受付開始 15.30 Amuza kunsido

17.30 夕食(小宴会) 講演・余興など歓迎

21.00 自由時間 HEL委員会

22.00 就寝

9月24日(日)

7.30 朝食(選手合宿所)

9.00 受付開始(市民会館)

9.30 大会開会; 開会宣言、ESPERO斉唱
議長選任、挨拶、報告

11.50 記念撮影、昼食、休憩

13.00 提案討議決定、講演(未定)

15.00 閉会、解散

会費: 下記申込先に送金、又は当日拂い、

大人 高校生 中小學生 不在参加

宿泊三食大会 4400^円 3700 2800 800

大会当日のみ(昼食) 1600 1300 1000

申込先: 053 苫小牧市系井393-83 星田方 [Tel. 0144-74-2539]

第42回北海道エスペラント大会準備委員会
振替 小樽 8431 苫小牧エスペラント

PROGRAMO DE LA 42-A KONGRESO DE ESP-ISTOJ EN HOKKAJDO

LA UNUA TAGO (La 23-a de sept., sabato)

- 15.00 Ĝiceto ekfunkcias en la gastejo: Senŝu-
kjuoka-Gaŝŝukjo, takeoka 26, Tomakomai,
tel. 0144-34-4872 aŭ 0144-34-6748
- 15.30 Amuza kunsido
- 17.30-19. Vespermango (Bankedeto)
- 19.00-21. Gaja vespero--Interkona vespero
Paroladoj, ludoj, prezentadoj k.a.--bonvenaj!
- 21.00 Libertempo: Komitata kunsido de HEL
- 22.00 Enlitigo

LA DUA TAGO (La 24-a de sept., dimanĉo)

- 7.30 Matenmango (en la gastejo)
- 9.00 Ĝiceto ekfunkcias en la kongresejo: Ŝimin-
kaikan, Asahi-maĉi 3-2, Tomakomai,
tel. 0144-33-7191
- 9.30 Malferma deklaro--Kantado de "Espero" --
Elekto de kongresaj prezidantoj, ties saluto.
Salutoj kaj raporto de: Prez. de HEL, gastoj,
lokaj grupoj kaj individuaj membroj, HEL, HEC.
- 11.50 Memoriga fotado--Tagmango--Ripozo
- 13.00 Diskuto kaj decido pri proponoj
Traduklaboro de jukaroj k.a.
Venontjara kongresejo
Parolado (de iu?)
Ferma Soleno
- 15.00 Disigo Ĝis revido !

KOTIZOJ (unuoj: japana eno)

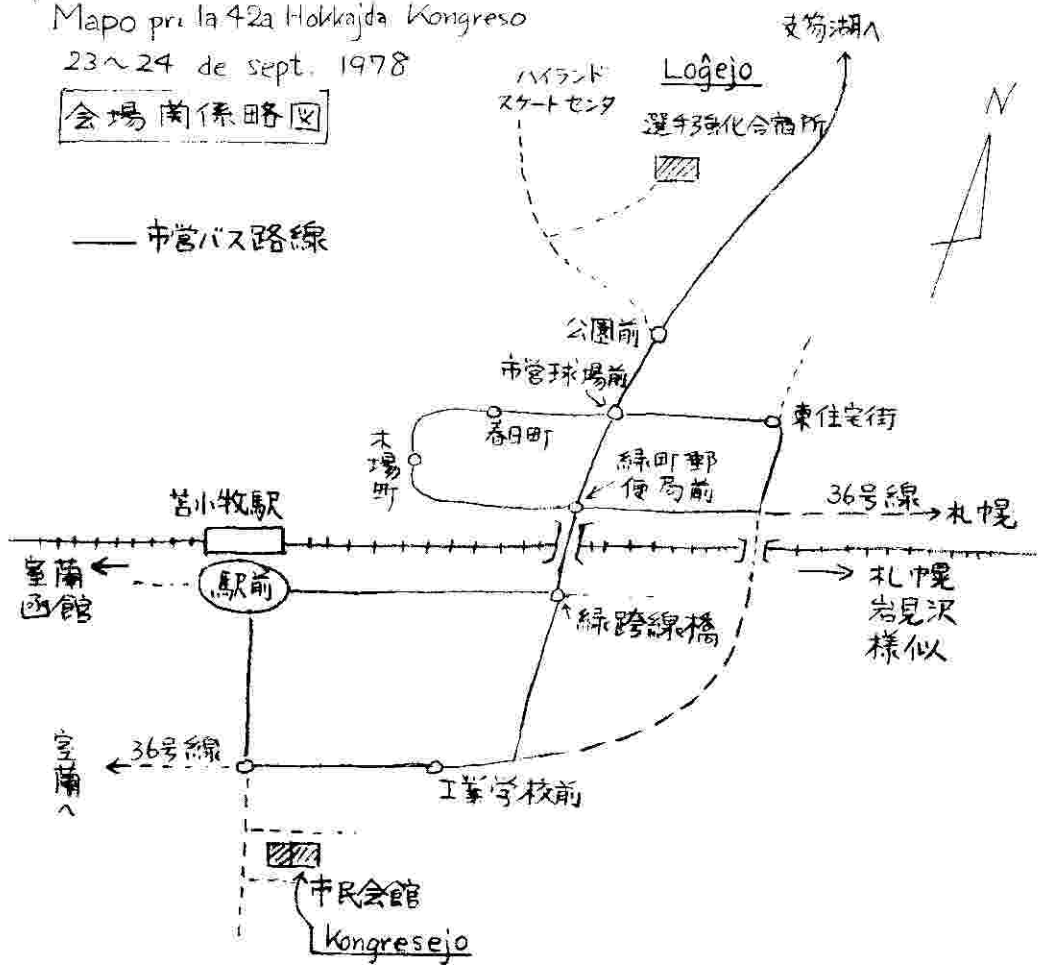
	normala	altlerne- jano	elementa- lernejano	morala aligo
loĝado kun mangoj, kongreso	4400	3700	2800	
nur por la dua tago	1600	1300	1000	800

Organizas: LKK ĉe A.HOŜIDA, Itoi 393-83, TOMAKOMAI 053
Kotizojn al la poŝtĉekkonto: Otaru 8431, Tomakomai-
Esperanto

Mapo pri la 42a Hokkajda Kongreso

23~24 de sept. 1978

会場関係略図



駅 → 宿泊所: 市営バス支笏湖線 8分, 公園前約徒歩 5~10分

駅前 発 1335, 1555, 1625

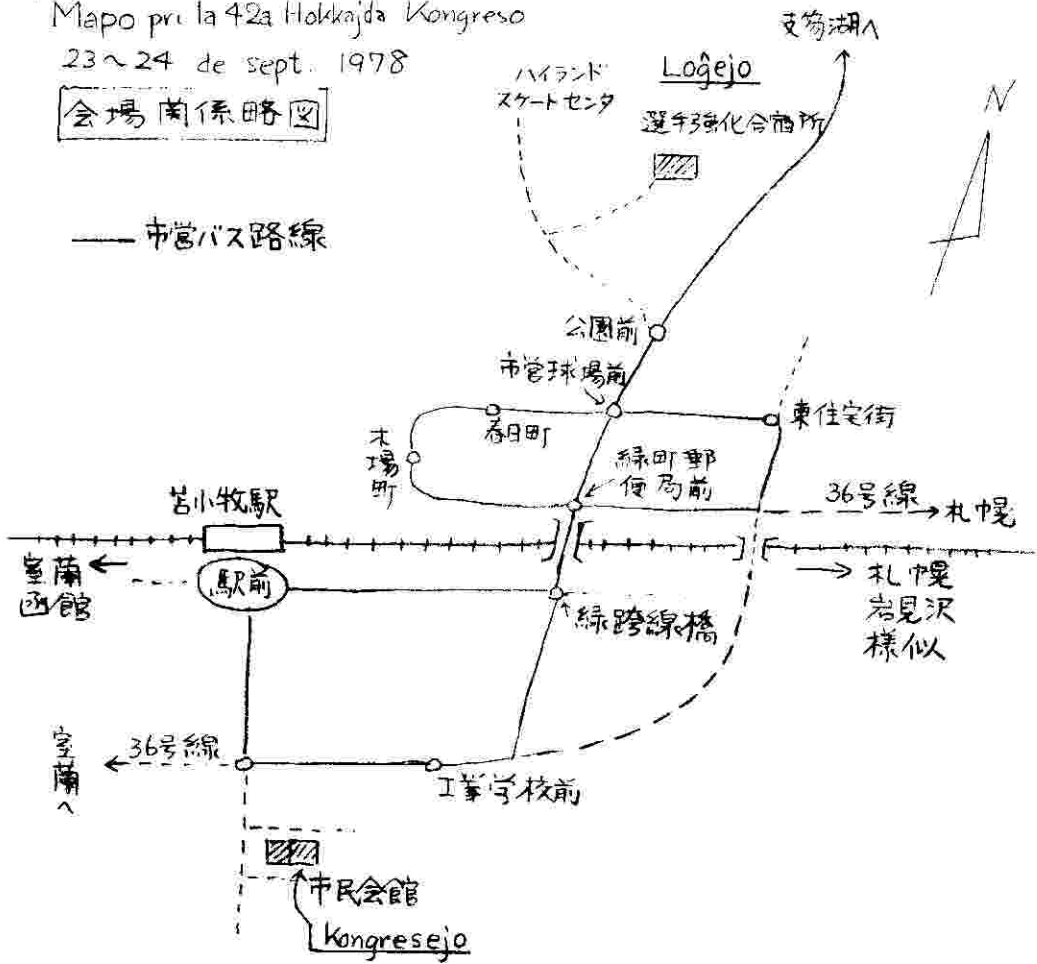
宿泊所 → 会場: 宿泊所 → 市営球場前バス停 (847 発)
徒歩 15分

②
7分 駅前十字街 904 → 会場
徒歩 5分

Mapo pri la 42a Hokkajda Kongreso

23~24 de sept. 1978

会場関係略図



駒前 → 宿泊所: 市管バス支笏湖線 8分, 公園前より徒歩 5~10分

駒前 発 1335, 1555, 1625

宿泊所 → 会場: 宿泊所 → 市管球場前バス停 (847 発) 徒歩 15分

②
7分 駒前十字街 904 → 会場 徒歩 5分

LEONTODO n-ro 62

1978-07-10

Eldonejo: Hokkajda Esperanto-Ligo
062 Sapporo, Toyohira-ku, Hiragisi 1-8
tel. 011-831-7248. poŝtĉekkonto (Otaru) 17075

Redaktoro: Sin. Fukuda
Tajpis H. Kitabatake

INFORMO. LA 4-AN DE FEB. 78

HEL - SEKRETARIÉJO

- ☒ LECNTODO n-ro 62 は昨年12月発行予定であったが、HEL 取政事情の混乱のために本年4月に持ちこすことになった。なお編集長も佐藤から北大生の福田伸男に変わった。今後は取政の許可範囲内で、4月、7月、12月の年3回の定期発行を目差す。
- ☒ HEL 会社の責任者が留目昌子氏（旧姓柴田）に、北海道エスプラントセンターの運営管理が尾玉広未氏に、共に10月15日のHEL 事務局会議で確認された。HEL 書籍部の責任者は今まで堀川祐重氏だが、なお昨年秋季、道外出版株式会社（札幌、La Alameda 等）への活版設備が滞りかゝるであつたので担当者をまねることにし、留目雅幸氏が任に就いた。
- ☒ SES の会費（HEL 会費と合計で2,440 円）はHEL の口座（小樽17075）に取り込んで欲しい。口座管理の便宜のため。
- ☒ 別紙に詳しく示すかセンターの維持が苦しくなっている。'74、6月23日に開き同日維持員総会にて「センター規約」が採択されているセンターであるが、当初の期待とは異様に定期的に使用するロードがSES 以外には現れず、現在同席同維持費がらみでも使用者があつてもHEL の事務局のごとさみになつており、「規約」ももはや現状にそぐはなくなつてゐる。規約の見直しもさることながら維持員の不足から存続の危機にある同所は、維持員（10月額500円）の募集と共に寄附をつかへてゐる。額はいくらでもがまねない。そのことなので御協力願いたい。なるべくなら各地方会単位でまとめてもらいたいのだが。（振替、「北海道エスプラントセンター」小樽22424）

☒ 七、九一〇の向。何、²¹ある者は下記の通り。

木村喜士治 861-7564

留目 雅幸 861-4965

昌子

福田 伸 721-2749

児玉 広夫 (01137)3-434

☒ 黒川恵美子（今は吉田さん）をききりには、S.E.S.では通ぐ郎の居す達はすべて絶絶か来た。留目雅幸さんはエスペランティストとしては先輩の柴田昌子さんと10月3日にまでつきあがった。稀陽考さんはこの1月、茅女性と、今はもう、奥さん村中にエスペラントの勉強とか、また3月には、藤村恵明さんが結婚の予定。この子組の「緑の家庭」はいずれも採集にわたって代燦てまうを続けらぬ、S.E.S.、I.V.、H.E.L.の三羽ガラスというべきが、最も期待される子組である。

☒ 最近着達かめるらしいK.E.A.（北見エスペラント協会）が同市の北見文化連盟が母体となり出版している「文芸北見」に「エスペラントの世紀」と題して、エスペラントがらの翻訳をのせた。原春は日本文学部から出版された“*Pli Internacia Lingvo dum Jascendo*”（*北見エスペラント*）で、著名人の国際語論をまとめたもの。この種お試みは、すでに数年前がう星田さんが個人で行ったが、団体としてというものは道内では珍しい。やはりK.L.E.G.できたえた*Ĉelageto* 代の発想の違いが、同書は定価1260円でH.E.L.書籍部で販売されている。（あるいは直場K.E.A. 夫島へ）

【後 書】

Leontoda が出せすいのでこのまっ写ものを作ってみた。北見の回りがきくところがザリ版の身だが。 坂張

1978 Kunloĝado de HEL en Sapporo la tainformilo

ANKAŭ Ĉi-jare ni planas (seki kunlaboradon de HEL) la kondiĉoj ne estas ja tiel bonaj (partoprenantoj devas alporti alian-komputilon), tamen ni kompensas tion per pli propra atento al Esperantoj.

DETAJLOJ

- LATIO= 1a-2a-3a de Julio
- LORO= Hokkaido Sup.-Centro
- KOTIZO= 3 000 enoj
- AUTO= Sendu al H. Sup.-Centro alianŝton enmetitan en la bagartan
- LIVADO DE AUTO= la 18a de Julio
- KLASO

- 1. Paroladoj (1 paro) vi. Niisara (Sapporo) per lia, kiu ankoraŭ ne fidi-rietas "La Takahara Universitato"
- 2. Niisara elabo (vi. Kioŭtatake-portado, kiu presas. (Toshimasa) Niisara "La Terano Unua"
- 3. Parolado (1 paro) vi. Moŭtate per lia, kiu volas pluri-rietas (Toshimasa) si en la parolado kaj niisara de Japana-rietas vi. Takahara (Osaka)

La karta programo de alporti tion komence de tio ĉi estas kole. Se vi an-avos alporti ĉi, sciri al ni pri via preparo. Ni, ja preparon laĵojn por vi, tamen ne ŝirgas, ke liaj-rietas. Liaj al rilato-rietas por via, kio-rietas per pluri-rietas en tuta programo. Ni ankoraŭ preparon ĉi-rietas per pluri-rietas. Niisara: via-rietas al komenco de vi la 3-an informilon de latio. Pura-rietas. Ke nome de la unua, evidentu ĉi-rietas. Liaj ne-rietas alporti tion, kio-rietas de-rietas: latio, latio-rietas. Liaj.

今年もまたHELでは会場を札幌にしたいが、会場は狭しとて、しかも、いろいろの都合がある。また、参加費は従来より高く設定されている。しかし、札幌には既に行き慣れた方が多いので、いろいろの都合はある。

日時

- 期 = 7月28日 - 30日
- 場所 = 札幌市ニッポロセンター
- 参加費 = 3000円 (別紙を参照)
- 申込 = 同様の申込用紙を7月15日までに提出
- 申込のとりかえ = 7月18日

クラス

- 1. 入門クラス 講師: 小杉 (札幌)
- 2. 基礎クラス 講師: 池田 (札幌)
- 3. 上級クラス 講師: 高橋 (札幌)
- 4. 特別クラス 講師: 藤原 (札幌)
- 5. 特別クラス 講師: 藤原 (札幌)

今年もまた札幌に会場を設けたいが、会場は狭く、しかも、いろいろの都合がある。また、参加費は従来より高く設定されている。しかし、札幌には既に行き慣れた方が多いので、いろいろの都合はある。

会場の日程

6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
la 28a	Vi zivonu porre fadlita viala vespermanĝo. Ĉi-rietas alporti ĉi-rietas per pluri-rietas. Liaj al rilato-rietas por via, kio-rietas per pluri-rietas en tuta programo. Ni ankoraŭ preparon ĉi-rietas per pluri-rietas. Niisara: via-rietas al komenco de vi la 3-an informilon de latio. Pura-rietas. Ke nome de la unua, evidentu ĉi-rietas. Liaj ne-rietas alporti tion, kio-rietas de-rietas: latio, latio-rietas. Liaj.														akcepto	orientado	libertempo	Bonan noktomi
la 29a	MATINO	matemanĝo	lernado	tegmento	lernado	riposto	lernado	vespermanĝo	Gaŝo	Vesperto	Bonan noktomi							
la 30a	BONAN	matemanĝo	lernado	ordigo	festado	Gaŝo	Pura-rietas. Ke nome de la unua, evidentu ĉi-rietas. Liaj ne-rietas alporti tion, kio-rietas de-rietas: latio, latio-rietas. Liaj.											